

牛王さま移転記

本匠村 久々宮 永

一

そこに何時から祀られていたのか詳かでなく、それが何さまであるのかさえも定かではなかった。唯知られてゐるのは、それを「ゴウさま」と呼ぶことと、七月九日（正しくは旧暦六月九日）が御日であり、その日井手算用（水路決算）があつて、お神酒みゆきを供えることが伝承されているに過ぎない。

この「ゴウさま」とは、本匠村井ノ上字前高の県道沿いの水路の脇、竹藪の中に祀られている一基の石の祠と、その左右に三基ずつ並ぶ五輪の塔の事である。

私は井ノ上部落の区長元に保存されている、旧藩時代

れていた場所も、昔は現在の堤の敷地内にあつたであろう事もわかつた。しかしそれが現在地に移された記録は何も残されておらず、村の古老に尋ねて回つても、それを裏付ける証言は得られなかつた。

このような牛王さまが、この度、計らずも移転の余儀なきに立ち至つた。それは県道拡幅工事による立ち退きである。県は祭祀者たる水路関係者に、いささかの移転費と祭祀料を交付して、移転作業一切を委ねられた。

役人は障らぬ神に崇りなしと錢呉れて牛王移せとぞ言う

二

六月四日、田植えを目前に控えた五月晴れのさわやか年の前高津留開田に伴なう検地帳により、「ゴウさま」が牛王（ごおう）の宮であることを知つた。又その祀ら

周囲一帯の藪が美しく刈り払われ、あらわとなつた牛

王さまの前、小野宮司の萌黃色の狩衣が朝の陽差しに眩しい。集まつた者は、水路関係者八名と工事人夫四名である。一同の顔には、これから何かを始めようとする者の持つ、あの晴れやかな表情はなく、何か気重げであつた。

井手総代の私は、先ず挨拶をした。

「この牛王さまと

言う神さまは

厄除けの神さまであります。

百三十年程昔

私達の祖先が

この前高を開

田した時、こ

こに移されて

以来、旱の時

には雨をもたらし、荒らい

雨風は防いで

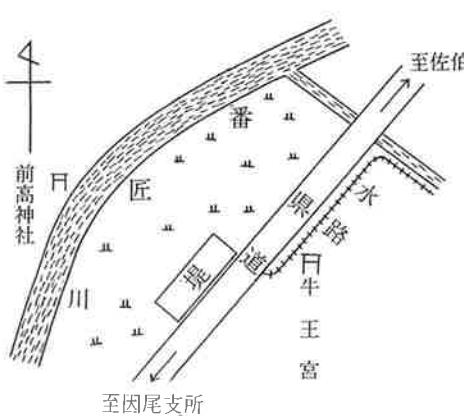
くれて井手を守り、私達を

助けて下さった神さまですのですで、決して障つて祟りをなすようなものではありません。……」私は言いながら、自分でもそのような気分になつて、一気にしゃべつた。

小野宮司は型の如くお供えを並べ神事を始めた。神事が始まるとき私は頭を垂れたままでいた。宮司の萌黄の狩衣が少しずつ震え、それがだんだん大きくなつて行くのを見じつと見ていた。玉串を捧げ、牛王さまの祠の下の土を、一すくい新しくお移しする場所に移して、神事は終つた。お移しする所は、背後の崖の上を掘りならして作つた場所である。

神事が終つて小野宮司は少し青ざめた面持ちで、口ごもりながら「お性の荒らい神さままで在られますので、工事関係者は、十分気を付けられてなされるように」と繰り返し言われた。私は初穂料を手渡しながら、後で直会を差し上げる旨を述べたが、宮司はご遠慮され、供物をまとめられてそそきと帰られた。

私はみんなに「じゃあ、わしが口開けをします」と言つて、右端の、空輪と風輪の欠けた塔の、火輪の部分を抱くようにして持ち上げた。そう重くはなかつたが、腰がふらつくような感じがして、一メートル程離れた大批



把の切株の処に下ろした。それを工事の人夫さんが受けたあとのみんなが次々に運んだ。

地輪を取り除けた時、誰かが「あ、何かあるぞ」と言った。地際に口径十五センチ程の壺らしいものの縁の部分が覗いている。

私は直感的に「これは外から移して来たものに相違ない」と思った。なぜならば壺の埋め方が浅いからである。そつといためぬように掘り上げた壺は、釉の掛った時代の新しい物であった。壺の中味はただの土らしいのでそのままにして、新しく移す処に元のように埋めた。そして村の教育委員会に電話で報告し、緒方課長に来て貰うこととした。

次の五輪塔の下からも、同じような壺が出て来た。私は嘉永開田の折にここに移したであろうとする、私の仮説にいよいよ確信を深めた。

三

更に想像を逞しくするならば、次の如くである。

嘉永年間、因尾村組大庄屋高野唯八郎の下に、前高津留開田は至上命令であった。番匠川は三竈江神社の下附近から下流前高神社附近まで、約三キロ余りの川原は、俗に大師河原と言うように、洪水時以外は全く流れが途

切れている。それで前高津留を開田せんとしても、灌漑用水を番匠川本流に求めるることは不可能である。従って小谷の僅かな湧水にたより、それを堤を築いて溜めるより方法がなかった。

堤構築予定地である、新七、惣右エ門、為七三名の畠地には、牛王さまの祠を始め、六基の五輪塔が点在していた。それでここに堤を構築するには、先ずこれを移さねばならなかつた。

時の小庄屋、一郎右エ門「後藤九代先祖」は、地目付惣右エ門（私方先祖）等と計つて、その移転地を小庄屋自らの土地である現在地に決定したのであろう。

では五輪の塔は何さまであろうか？　私は次のように思ふ。それは前高神社にまつわる平氏落人伝説の、その落人達の墓か、もしくは供養塔であったであろうけれども、当時はもう既にそれが何であるか、定かでなかつたのであろう。人々はその何か得体の知れぬ五輪塔の移転には、底知れぬ恐怖を感じ躊躇した事であろう。

そこで小庄屋らは使を走らせて、佐伯の御城下から新しい壺六個を買い求め、五輪塔の底土をその壺に納めてお移しをしたものであろう。人々は開田と言う至上命令の下に、畏れつつもそれを移し、牛王さまと共に祀つた

のではないだろうか。

惣右エ門ら移しましけむ牛王の宮五代目吾の又移す
かも

四

中心に祀られている牛王さまの祠の下からは何も出なかつた。けれども、左側の五輪塔の下からは、右側のと同様な壺が掘り出された。作業は思いの外早くはかなり、一基残すだけとなつた頃、村教委の緒方課長と高野主事が来られたので、始めて壺の中の土を全部出して見ることにした。土は小さな石灰岩礫を交えた、この附近の畠土に普通に見られるものであった。丹念に調べてみたが外には何も見つからなかつた。

こうして私達は総てお移しをすませることができた。

新しい場所に並んだ所を見ると、それぞれに風格があり、

趣があつて以前の藪の中に埋つていた時より、はるかに見栄えがする。私は肩の荷を下ろした思いで公民館に引き上げた。そして晴れ晴れとした気持で、直会のビールを酌み交わした。

五

七月十九日 今年の梅雨明けは例年より随分遅かった。

しかしそれだけに降雨量は多く、毎年水不足に悩む前高津留も堤に水を満々とたたえている。牛王さまの御日である九日は、都合の悪い人が多く、十日遅れの今日井手算用が行われた。

前高の県道拡幅工事は、その後順調に渉り唯一人の怪我もなく、完成間近となつていて。道路の拡幅に伴い沿線にあつた水路も新しく造り替えられ、その真新しい水路を水が勢いよく堤に流れ込んでいる。

牛王さまは、この新しい水路より更に二メートル程上に祀られているので、広くなつた県道からもよく見えるようになつた。

私は今日、移転後始めての井手祭りのお神酒を持って参つた。新しく、高きに鎮座します牛王さまからは、前高津留のどの田圃もよく見える。

転作田や、休耕して、もはや手のつけようもない荒らし田の交り合う稻田を、牛王さまはどのように眺めて在りますのであろうか。私は久しぶりに照りつける夏の陽差しの中に立つっていた。

県道成り高きに祀れる牛王の宮荒らし田交えし稻田
見ませり